



2010/3/18 中村百合子

青山学院大学教育人間科学部教育学科（図書館情報学ゼミ）との交流報告

2010年1月28日（木）に、青山学院大学の小田光宏教授と野末俊比古准教授のゼミと、本学の中村百合子専任講師のゼミで、合同の卒業論文報告会を実施した。青山学院大学からは、学期末のテスト期間中であり、途中人の出入りがあったが、最終的に20名ほど、また本学からは中村ゼミの9名と飛び入りで宇治郷ゼミの1名が参加した。

教育学系の学部/学科に図書館情報学の研究者が2名体制で所属する私立大学に、青山学院大学教育人間科学部と同志社大学社会学部教育文化学科がある。そのように類似の立場にあることから、両大学の図書館情報学者の間での情報交換は意識的に行なわれてきたが、昨年には青山学院大学のFD活動の一環として、小田教授、野末准教授の本学訪問を受け、中村が加わって3人で、図書館情報学の教育活動について、意見交換の機会をもつことができた。そこで本年度は、互いの指導している学生さんを巻き込んだ交流と情報交換を行ないたいと話していたが、中村としては、これを機会にGPによる創造教育を探究を試みようと考えた。

今回は、本学の学生さんたちに、自分たちのホームグラウンドではない場所で、他大学の学生さんとの知的交流戦に臨んでみてもらおうと思い、開催場所を青山学院大学青山キャンパスにさせていただき、青山通りに面する14号館の立派な教室を用意していただいた。プログラムの内容は、具体的には、4回生による卒業論文の研究成果報告を、各大学から4名ずつが行なうこととした（発表20分、質疑応答10分程度）。学生さんにとっては、他大学の同種のゼミとの交流の場において、それぞれに大学を代表して意見交換や議論に参加することで、専門分野の知識を広げ、深めるだけでなく、責任感をもって他者に自らの研究成果や意見を伝え、コミュニケーション能力を開発することが期待できると考えた。また教員にとっても、教育学系の学部/学科での図書館情報学の教育・研究活動のあり方について、互いの教育実践から示唆を得ることが期待できると考えた。

10時から夕方16時過ぎまで、途中1時間弱の昼食時間以外、ずっと座りっぱなしで、以下のスケジュールで交流戦を行なったわけだが、参加者のあいだでは最後までなかなかの集中力が維持され、それは驚くほどのものであった。

1. 西谷香奈（同志社大学中村ゼミ）「朝の読書の教育的意義」
2. 仙波知裕（青山学院大学小田ゼミ）「子どもの読書におけるイラストレーションの影響」
3. 氷見望（同志社大学宇治郷ゼミ）「日本の外国人学校におけるバイリンガル教育」（お昼ごはん）
4. 栗原万里枝（青山学院大学野末ゼミ）「メディアによる学習支援」
5. 白髭真由美（同志社大学中村ゼミ）「漢字読み書き能力向上のための教科書への提言：漢字正答率と教科書の関係の調査から」
6. 森永和佳子（青山学院大学小田ゼミ）「ブックスタートの役割：市川市立中央図書館と白井私立図書館における実践から学ぶ」
7. 近土真理子（同志社大学中村ゼミ）「日本の近代の子ども観」情報化社会の進展との関わりから」

最初に青山学院大学の学生さん方が西谷さんの発表に対して積極的に質問をしてくださったことから、質疑応答は、夕方になると疲れてきて低調になったものの、概して活発であった。指導教員以外の二人の教員からも、それぞれの発表者に対してずいぶん質問をしたが、学生さんたちは冷静によく答えられていた。私の場合には、青山学院大学の先生方のご質問から、指導が不足していた点を認識することもあった。

実は、発表者は、同志社側ではあみだくじで決定していたのだが（もちろんこれは、誰が発表してもいい発表ができると信頼してのことである）、この準備が、卒業論文の提出後にあつて、改めて卒業論文を客観的に見直す大変いい機会になったようだと言った。京都に戻ってから、発表が当たらなかった学生さんから、「あみだくじで外れて喜んでいましたが、やっていたらよかった」という一言が聞かれたが、私はこれは本心だと思う。青山学院の学生さん方はレジュメを用いての発表、一方で本学の側は全員がプレゼンテーションソフトを用いて、スライドを印刷したレジュメを配布しての発表であった。どちらがよかったと言えないだろうが、プレゼンテーションソフトを用いたことが、他者に伝えるための整理をしておす機会になったのではないかと発表準備の過程を見ていて感じた。

会のしめくくりでは、小田教授から、「来年度もできたらいいですね」という一言があり、これが私にはリップサービスではなく聞こえたのだが、また押しかけても本当にいいのでしょうか、小田先生、野末先生。何にせよ、とにかく今年については、学生さんたちにとっても私にとっても、大変に勉強になり、ゼミ活動を見直すいい機会になった。お忙しい学期末に一日を割いて私たちを迎えてくださった青山学院大学の皆さん、また当日飛び入りでおいでくださった青山学院大学名誉教授の古賀節子先生にも、ここに記して改めて感謝をお伝えしたい。ありがとうございました。（文責・中村百合子）

以下、参加学生さんから一言ずつ（お名前の五十音順）。

相原愛史

中村百合子ゼミの一員として青山学院大学と同志社大学の交流会に参加させて頂きました。両大学の卒業論文発表を聞き、その内容の素晴らしさに圧倒させられました。私自身も卒業論文を作成しましたが、比べるのが恥ずかしいくらい発表者全員がレベルの高い卒業論文でした。発表の内容濃さや堂々したプレゼンの仕方など、これから社会人になる私にとって聞いているだけで大変勉強になることばかりでした。その中でも、白髭さんの卒業論文発表はずば抜けてインパクトがあり、説得力がある完璧なものだったと思います。それに、青山学院の生徒とも昼食の時に色々な話しをして交流をすることができてとても楽しい交流会でした。あっという間に一日が過ぎて終わってしまいましたが、とても刺激になった機会でありました。

伊場祐太郎

他のゼミとかかわる事で、集団の中の集団という位置づけの興味深さを感じた。他を見ることが自己を知ることができ、改めて自分たちのゼミの色を理解できた。先生の専門分野とは関係ない卒論ばかりの自分たちのゼミが当たり前になっていて、その環境が驚くほど自由なことを痛感した。また、一番おもしろかったのは、先生同士の議論の中でヒートアップし過ぎて、口喧嘩みたいになっていたことだ。卒業直前ではなく、もっと前に、そういった他の刺激を受けるチャンスがあれば良かったかなあと思う。

大平しほり

他大学の学生との交流会は初めての経験で、とても楽しかったです。発表は、同志社の学生とはまた違ったテーマが多く、新鮮でした。少女漫画の中の絵がアニメなのかで議論したり、電子辞書と紙の辞書の長所と短所を考えたり、とても興味深いテーマばかりでした。また、私は発表していませんが、同志社の学生が発表した内容については、青学の教授や学生の方から鋭い質問がなされていて、違った角度から考えることができました。自分たちでは気付いていなかった問題点や課題も発見でき、今後の研究に生かせると思いました。

また、ゼミの内容だけでなく、青学の食堂で昼食をとったり、休憩時間に青学の学生さんと交流を深めるなど、普段の大学生活では経験できないような貴重な経験ができて本当によかったです。今後も、このような機会が多くあれば、よりよい研究ができるようになり、人とのつながりも増えると思うので、活発に開催してほしいと思いました。

倉本奈緒子

毎週ゼミで、論文の内容について同じメンバーで議論し、書き上げた論文であったが、いつものメンバーとは違った方の目を通すことによって、また新たな視点からの疑問点が湧いた。自分は来年に卒業論文を提出することになるのであるが、今回、この交流会で得た視点を活かして、自身の卒業論文を書き上げたいと考えている。

近土真理子

今回の勉強会で、自分が知らない分野を研究する学生と出会い大変勉強になりました。わたしは卒業論文を発表させて頂きました。はじめて出会う人に自分の研究を一から説明してわかってもらうことは、緊張もありましたが自分の力を試せる機会になったと感じています。新たな視点や方向から指摘をして頂いたことで、自分の研究を考え直すことができました。このような勉強会があればお互いの刺激になります。継続して交流をしていくことができれば、学生同士のコミュニケーションもより活発になり面白いのではないかと思います。

白髭真由美

今回の交流会は双方の学生にとっても意味のあるものだったと思います。私は発表を通して、自分では気付けなかった視点から質問や感想をいただきました。青山学院の教授や学生の方にとっても興味を持って聞いていただき、嬉しかったです。これらのご指摘はは全て私の今後の研究に対する活力になったと思い、心に留めておきます。また青山学院の学生の発表は話の構成がとても巧で学ぶことがたくさんありました。この貴重な出会いに感謝します。

中島悠希

今回の交流会に参加して最も良かったと私が感じた点は、たくさんの人の研究内容を知ることができた点でした。

同じゼミ生であっても、どのような研究をしてどのような内容の卒業論文を作成したのかということ詳しく知らなかったこともあり、この交流会を通してゼミや大学の垣根を越えて、ほかの人達の研究内容を知ることができ、非常に新鮮でした。今まで自分では考えにも及ばなかった分野や興味深いデータの発表などを通して一緒に勉強できたことで、多くの知識と刺激を受けることができました。これこそ、交流会に参加する最大のメリットだと感じました。

交流会において、印象的だったのは仙波さんが発表した「子どもの読書におけるイラストレーションの影響について」と白髭さんが発表した「漢字読み書き能力向上のための教科書への提言-漢字正答率と教科書の関係の調査から-」です。青山学院大学・仙波さんの発表ではアニメとマンガの違いについてディスカッションした際に、年代によってアニメ

とマンガの概念そのもの（どういった絵がアニメ的でどういった絵がマンガ的か）に差があるということを知り大変驚きました。より若い人の方が、区切りが細分化されているように感じました。白髭さんの発表した教科書に出てくる漢字に関するデータを見て、大量の資料を確実に捌いたり根気強く分析をしたりする点が私には不足している点であり彼女の素晴らしい点であると知ることができました。そして昼食の時間には、青山学院内の食堂でオススメのメニューをいただくこともできてとてもアットホームな交流会であったと思います。

全部で4つのゼミが集まり交流会が出来たので、普段のゼミでは体験できないような迫力のある発表会だったと思いますし、共通点の多い学科やゼミでも非常に多様な研究や勉強をしているのだと知ることができました。そして何より、多くの学生と交流することで一人だけの研究では知りえなかった範囲のことを多く知ることができました。今回の交流会は私にとって大変有意義なものになったと思っています。ありがとうございました。

名田麻里子

今回青山学院大学と同志社大学という二つの大学の学生が、互いの卒論を発表しあい、意見を交換することで、非常に刺激的な時間を過ごすことが出来たと感じています。そのような機会を与えて頂いた関係者の方々や、当日温かく迎えて下さった青山学院の先生方や学生方に感謝の気持ちでいっぱいです。当日は6時間ほど、お互いの卒業論文の発表及び意見交換だったのですが、青山学院の学生さんのオリジナリティがある卒論のテーマや内容に驚かされました。意見交換するなかでも、自分とは違った着眼点、問題の捉え方などを知り、世の中には色々な人がいて、自分とは違う色々なものの見方があるのだと再認識させられました。また青学の学生さんに驚かされたと同時に、同じ同志社のゼミ生の完成した卒業論文を客観的に見ることによって、その内容の面白さにも驚かされました。あつというまの6時間でしたが、色々な考え方に触れ、とても充実した時間を過ごすことができました。この1年間卒論を書くことは決して楽なことではなかったですが、それによって自分を知り、自分以外の人やものを知り、そして最後に今回のような機会を頂いたことによって互いを刺激しあえる人がいることの大切さを教えて頂きました。

西谷香奈

ゼミ交流会に参加して、自分の卒論を発表する機会を頂いて、改めてさまざまな意見を聞くことが、いかに大切かということを感じました。自分で卒論を書いていた時には気付かなかった問題点や、研究のこれからのあり方など、非常に参考になりました。

また、他大学の学生の発表で非常に興味深いものもあり、いい刺激になりました。この交流会は、大学内、ゼミの中だけでは経験できないことをできた機会だったと思います。

氷見望

青学の方はオリジナリティがあると感じました。図書館情報学の中でも図書館そのものの比較研究を行っている方はもちろん、図書に使われている挿し絵が与える影響について研究されている方もいて、その着眼点が大変興味深かったです。私の卒論は図書館情報学の分野ではなかったのですが、他大学の学生や先生方に発表したことで客観的な意見を聞くことができ、また活発な議論が展開されたので貴重な経験をすることができました。所属しているゼミ生以外に発表をすることは、専門外の方の意見を聞くことになるので、逆に視野が広まり研究を深めることができると思います。このような他大学との交流は学生の刺激になり意義のあることだと思います。

以上。